

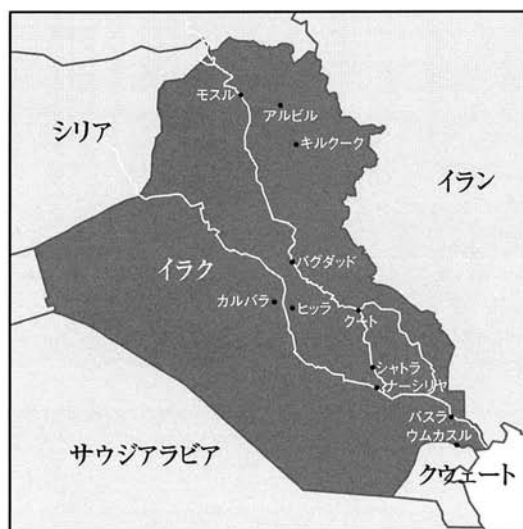


285号 **緊急発信** 広河隆一写真集

# アメリカはイラクで何をしたか



爆撃で始まり、  
爆撃で終わった戦争。  
日本は爆弾を  
落とす側についた。  
だから先ず被害を  
きちんと調査して、  
遺族に謝罪をし、  
補償するのが  
当たり前ではないか。



## 目次

1	爆撃の下で .....	2
2	遺族が語る戦争 .....	22
3	クラスター爆弾の爪痕 .....	34
4	占領者アメリカ .....	40
5	戦火消えぬ日々 .....	48
6	白血病の子どもたち .....	50
7	おわりに .....	64

アメリカはイラクで何をしたか



# 爆撃の下で





2003年3月28日、バグダッドのナセル市場に落ちた爆弾で、負傷した子ども。  
市場が混雑する時間に爆発が起こり、3日目までに死亡した人の数は66人にのぼった。



査をした英国のジャーナリストが、生産されたアメリカの工場と、爆撃機から落とされた日時まで  
つきとめた。



ナセル市場で負傷した子ども。

アメリカは、この爆弾がイラク軍の対空ミサイルだと宣伝したが、破片に刻印された数字の追跡調 ➤



て語った。医師はこの病院の医薬品がまもなく底をつくと言った。





ナセル市場で負傷した子ども。

「こんな目に遭わせたアメリカを絶対に許さない」と、ベッドのかたわらの両親は、声をふるわせ



何百人もの人が叫び声とうめき声をあげているはずだが、その声は私たちの耳には届かない。まして爆弾を落すスイッチを押す人間は、そうした想像力さえない。



爆撃されたナセル市場近くから避難する女性と子どもたち。連日、夜の間、爆撃は続いた。パレスチナホテルにいた私は、爆発音で飛び起きることもよくあった。しかし1つ爆弾が落ちるたびに、



撃されたのか、わからない。



バグダッドのアルシャハブ商店街。

道の両側で爆弾が2発爆発し、民間人14人が死亡した。周囲には軍事施設もなく、ここがなぜ爆





爆撃で破壊されたバーブル・ムアッザム電話通信センターの前の民間人家屋。破壊された我が家の近くで嘆き悲しむ女性。









ナセル市場への爆撃から3日後に亡くなった39歳の男性。  
病院で担架を取り囲んだ遺族が悲嘆に暮れている。





ナセル市場で、死者の出た家の前で泣き叫ぶ女性。



電話通信センターを狙ったミサイルは、わずかにそれで100メートル先の民家を直撃した。爆撃する側が誤差率2〜3メートルだと主張しても、実際には誤差数百メートルになることもある。



3月25日にガデシア地区にあるヤルムーク病院と学校に隣接する民家が爆撃され、直径15メートルもあるクレーターが出現。ぬいぐるみの人形やおもちゃの自動車、教科書が散乱していた。



バース党シャトラ支部を狙ったミサイルは、150メートル離れたサアドの家を直撃した。居間にいた5人が死に、18人が負傷。2人は未だ遺体すら発見されていない。息子は足を切断された。



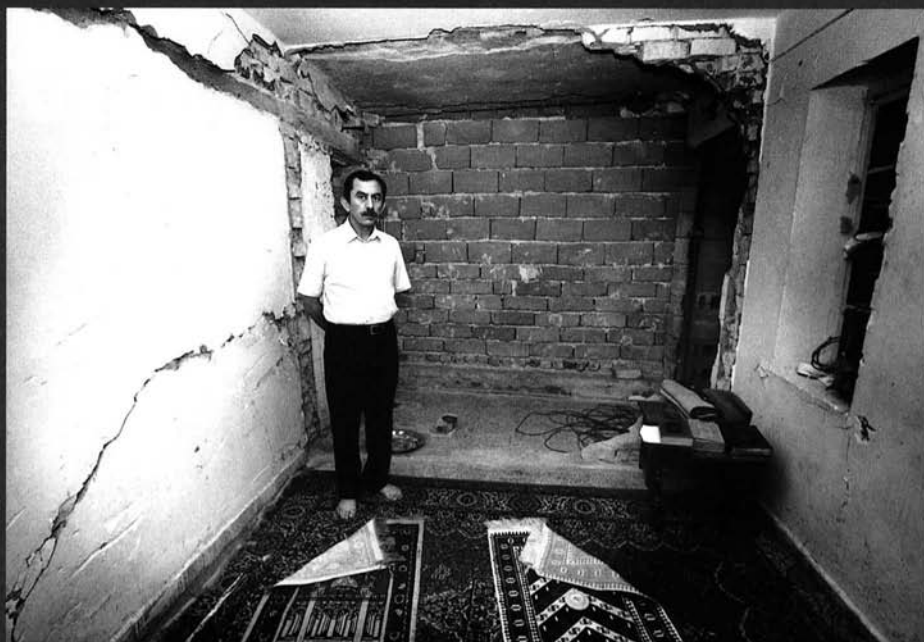
ナジャフのアジーズの家では、8歳の子どもを含む4人が犠牲になった。彼の住まいの裏には3家族住んでいたが、そこでも多くの犠牲者が出た。







バスラの子どもの墓で13歳の少年の死を嘆く母親。  
家の近くでイラク兵が反撃し、その周囲一帯を英軍が爆撃したことで、少年は死んだという。



アクラム医師（バスラ教育病院院長）の家族は、戦争中、奥まったこの部屋に寝泊まりしていたが、隣家を襲ったロケット弾が、この部屋の壁と天井を破壊した。今は応急処理がしてある。

## 遺族が語る戦争

バスラ教育病院院長アクラムの家は、爆撃で隣家4軒が破壊され、奥の部屋が倒壊した。この部屋が一番安全と考えた家族は、ここで戦争中の18日間避難し寝泊まりしていた。その結果アクラムは4人の子どもたちを失い、姉妹、母など6人が命を絶たれた。隣の家では家族7人と知り合い1人が殺された。アクラムはその時病院で当直中だった。

アクラムは米英軍に抗議したが、英軍は、この攻撃が隣家のイラク軍南部司令官殺害を目的とした正当なものだと説明した。しかし爆撃は英軍がバスラに侵入する数時間前の出来事だった。アクラムは次のように語る。

「イラク軍南部司令官がいたから攻撃したというなら、英軍は次の日にもここに来て、遺体を搜索しなければならなかったはずです。でも英軍はここには来ませんでした。イラク軍南部司令官はめったにこの家には戻らず、当時ここから200キロ離れたところに





戦前のアクラム医師の家族と親族。このうち子どもを中心とした8人と、撮影後に誕生した幼児など2人が爆撃で殺された。

いたのです。私はこの攻撃は、市民に多くの犠牲を出して、恐怖におとしられ、バスラ占領を容易にするためのものだとは確信しています」

彼は次のように続ける。

「私は、この市民への攻撃を決定した人物を、戦争犯罪人として、どれだけ時間がかかろうとも、裁判で裁くつもりです。彼が米大統領であつても、英首相であつても、裁くつもりです。彼らは南部司令官やサダム・フセインと同じです。彼らは、同じ顔をしています。同じコインの両面のようなものです」

アクラムの家族の10人は、今バスラの子ども墓地に仮埋葬されている。喪が明けたとき、遺体はシーア派の聖地ナジャフに葬られることになっている。

またアクラムは、米英軍の爆撃による犠牲者は、ほとんど民間人だったと証言する。

「私の病院では、550人の市民の負傷者を収容しました。そのうち80〜90人の死亡者はすべて民間人で、女性や子どもたち、老人が中心でした」



イラク北部モスル近くの自宅で、爆弾の跡を指さすバシャール。「ここで6人が死亡した。この村の住民はキリスト教徒で、この家族もそうだった。」

モスルの郊外にあるキリスト教徒の村が爆撃されたのは、3月30日のことだった。そのときのことを、隣のアルビドの病院に入院しているマジドリーンは、次のように語る。

「義理の兄弟と彼の妻と子どもたちが私たちを訪ねてきて、私はお茶を出していました。そして人びとの到着から15分後の10時半に爆撃が始まったのです。」

私は最初のミサイルの爆発で、両親を失いました。後になって、私の家には2発のミサイルが撃ち込まれたことを知りました。この爆発で私の幼い娘（バレンティア・ベイシャー2歳）が死にました。この時、私は妊娠8か月でした。おなかの子も生まれてすぐ死にました。義理の兄弟も、そして夫の母親もみな死にました。

私たちに何の罪があるのでしょうか？ 私は結婚して幸せに暮らしていました。しかし、その幸せは私の目の前から消えてしまいました。

私の幼い子どもが亡くなったのは、彼女が何か悪いことをしたとでもいうのでしょうか？ 彼らには私たちが民間人だとわからなかったのでしょうか？



バシャルの妻マジドリーン（24歳）は、爆発が起こったとき顔面にガラスの破片を受け、失明した。彼女の2歳の子も死亡。彼女は妊娠していたが、その子どもも死亡した。

私はパイロットに会いたいのです。私自身と死んでいった人の復讐をするために。彼は私の人生をめちゃくちゃにしました。残りの人生を私は病院で過ごすことになるでしょう。もう2か月経ちましたが、毎日疲労感でいっぱいです」

彼女は親戚のいるアメリカでの治療を希望しているが、アメリカは彼女の入国を認めていない。彼女がアメリカに入って、何が起こったのか人びとが知ったら、この戦争の本当の姿があらわになる。それを政府は恐れているからではないか。



爆撃前に撮影されたマジドリーンと彼女の娘。この娘が死亡した。



18年捕虜だったが、彼女はずっと待っていてくれ、私の両親と子どもの世話をしてくれた。どんな補償金をもらっても、妻は帰ってこない。彼女なしで生きているのが信じられない」と彼は言う。



3月23日、モハメッドの家が爆撃された。妻は心臓が体から飛び出し、赤ん坊も体がずたずたに切り裂かれていた。「私の妻は、私のすべてだった。みんなから愛されていた。私はイラン戦争で



ナーシリヤ総合病院統計局のアハメッドによると、この病院だけで450人が死亡し、1,000人が負傷して治療を受けたという。死者の身分証を見ると、多くは子どもと女性、老人たちである。



焼けこげた部屋の中で、子どもを抱きかかえるサアド。シリア人の志願兵がこの近くに身を隠した。彼らは抵抗しなかったが、爆撃を受け、このあたりで民間人10人が殺されたという。





バッサムの家は、3月22日に爆撃された。5人が表に座っていたが、爆撃音を聞き、みんなあわてて家の中に逃げ込み、階段の下に隠れた。しかし次のミサイルがこの家に命中し、5人全員が死んだ。



バグダッドのファティマの家族は避難しないで、この家に留まっていた。しかし4月3日の爆撃のときに、2人の子どもと夫が家の外に出ていて、クラスター爆弾で死んだという。男の子は、命は助かったものの、全身にクラスター爆弾の傷が残った。



を阻まれ、彼は車を止めた。その直後に銃撃が始まり、車が炎上し、このときに3人の子どもが射殺された。もう1人の子も、後に死亡。残った全員も重傷を負った。(P.32 参照)





3月25日朝、ナーシリヤに住む医療技師ダハムの家周囲に多くの爆弾が落ちた。彼は家族を避難させようと、乗用車に弟と妻と4人の子どもたちを乗せて、脱出する。しかし米軍戦車に行く手



トラックの荷台に親族の子どもと女性を乗せて避難しようとしたカリールは、ヘリコプターのミサイルで攻撃された。荷台から逃げ出した子どもたちを、米兵が射殺した。計14人が死亡した。

ダハム（30〜31ページ）は、病院で次のように語った。

「3月25日に私は家にいました。11時頃に多くの爆弾が道路や前の家と隣の家に落ちました。私は家族を連れ出すことに決めました、私は自分の車を持っています。それで妻と子どもたちと私の弟を連れ出したのです。

私は彼らを100キロ離れたナーシリヤ北部の自分の実家に連れて行くことに決めました。

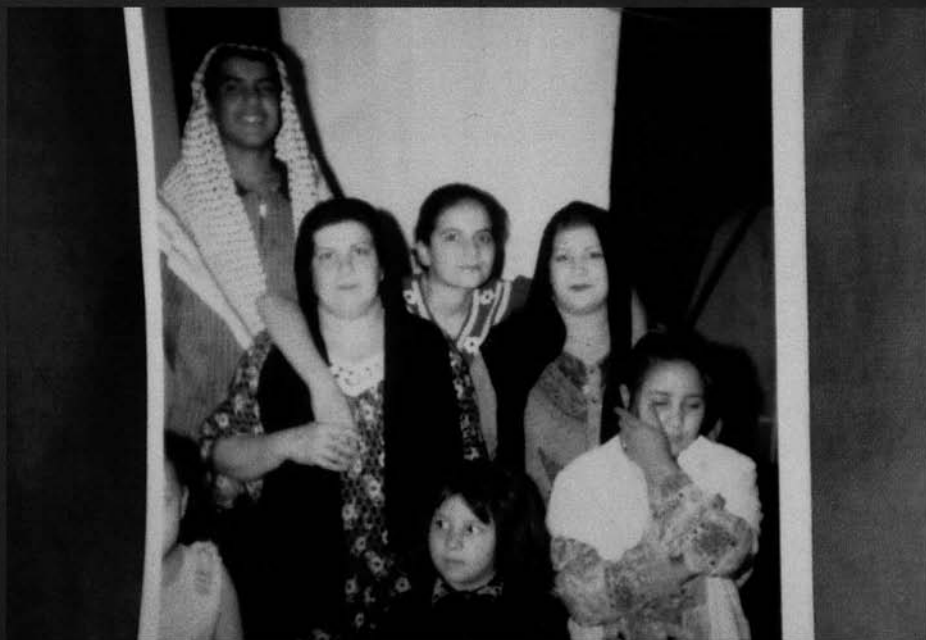
ナーシリヤを出て70キロメートルほど先に、検問所がありました。そこに米軍戦車4台がいました。

私の車は新しく、白色です。軍用車と間違えられることはありません。家族も赤や黄色など、ひと目で民間人と分かる服装をしていました。

私は車を停めたままでした。怖かったからです。

そのとき突然5〜6人の兵士が撃ってきました。彼らは私の車が燃えるまで撃つのを止めなかったのです。

私の弟は8か所撃たれました。片足に2発、もう片方の足は切断されました。私の右足も切断されました。



カリールの家族。ほとんどが殺された。

た。そして腕に1発、胸に1発、頭にも1発撃たれました。私の妻も6発撃たれました。私の4人の子どものうちの、3人は即死しました。

私の弟も私も妻も、米兵に車から引き出されました。娘のザイナブは、その時は生きていました。米兵は、死んだ私の子どもたちを車から降ろし、道に並べました。そして私たちを連行したのです。

連れて行かれたのはナーシリヤの米軍基地の病院でした。そして彼らは夜11時に、私たちを犬のように病院の外に放り出したのです。それで私の娘ザイナブは死んでしまいました。寒さのせいです。犬でもこんなことはしない。娘は死んでしまいました。すごく寒い日でした。

今ザイナブはナーシリヤ空軍基地の中に埋められています。私は他の3人の子どもといっしょに葬ってやりたくて、ザイナブの遺体を返してくれと頼んでいるのですが、彼らは返事もしてくれません」

ダハムは片足を切断し、人工肛門をとりつけて、一日中ベッドから動けないでいる。隣室には妻も入院している。

# クラスター爆弾の爪痕



損傷を受けた。全身が麻痺して、1日中、裸で部屋に横たわっている。



現在もっとも深刻な後遺症を残しているのがクラスター爆弾だ。この少年バシム・シュラドは3月22日に部屋にいたところ、爆発したクラスター爆弾で、後頭部、背中、臀部（でんぶ）に深刻な



帯の住宅にクラスター爆弾をばらまいた。彼は気がいたら病院のベッドにいた。このとき、救急車も攻撃されたという。左の息子は体じゅう負傷し、腹部に重症を負った。





ムッター家の人びともクラスター爆弾が襲いかかった。写真右のメヘディの証言によると、人びとが寝ていた夜中の1時半頃、前の道をイラク軍の車輛が通過した。それを狙って米軍は周囲一

私はイラクの被災地を調査して、クラスター爆弾の民間人被害者が余りにも多いのに驚いた。クラスター爆弾は、抵抗するイラク兵やアラブ志願兵に対して、米英軍がもつとも頻繁に用いた兵器のようである。

この爆弾は、全長2メートルほどの親爆弾が空中で開き、中から数百の子爆弾がばらまかれる。この子爆弾が地上で爆発すると、中につめられた数百の鋼球が周囲の人間を攻撃するようになっていく。さまざまな大きさや種類があり、イラクの病院では、多数の釘状のものが体内から摘出されたという医者証言も聞いた。

米英軍は、市街地で一人でも抵抗する人間を見つけると、その周辺数百メートルにわたって、大量のクラスター爆弾の親爆弾を投下した。どれか一つの子爆弾でも相手を殺傷できればいいと考えたためである。しかしその残りの子爆弾は、周辺の民間人の頭上に降り注いだのである。

クラスター爆弾はベトナム戦争で使われ、レバノン戦争では大量にイスラエル軍が使用した。その後、湾岸戦争、アフガン戦争でも使用されている。レバノン

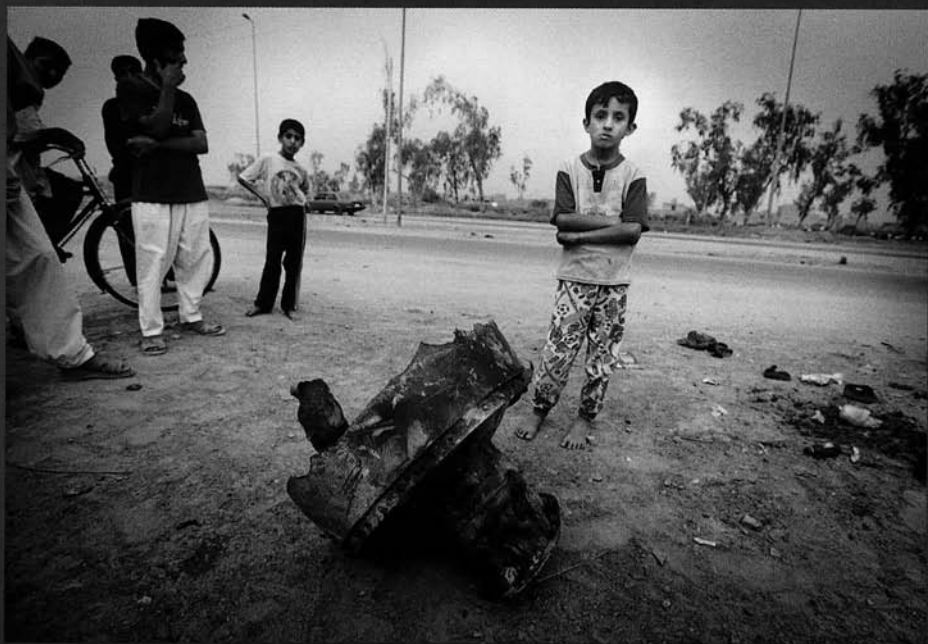
戦争では三角錐状のものに開く羽が付いているもの、湾岸戦争ではボール状のもの、アフガン戦争では黄色い筒の形のものを私は見ている。

イラクでは3ミリほどの鋼球がプラスチック状のシートに何百と組み込まれ、筒の外側にそれが巻かれて、中の火薬が爆発したら鋼球が猛烈なスピードで周囲に発射されるというものを見た。これほど小さな鋼球でも、コンクリートに穴を開けていた。

クラスター爆弾は対人殺傷兵器で、至近距離で小型の拳銃を体に数百発発射したと同じ効果を与える。被害を受けると治療が不可能で、患部を切断するほかないといわれる。

クラスター爆弾の約3分の1は、ただちに爆発せず、不発弾となるが、次に子どもたちが手で触れたり、人びとが足で触れたりしたときに爆発する。こうした「地雷化」したクラスター弾は、多くが処理されておらず、今でも被害が絶えない。非人道的兵器として国際社会から非難を浴びているが、日本の自衛隊も保有している。





ナジャフに落とされたクラスター爆弾の親爆弾。



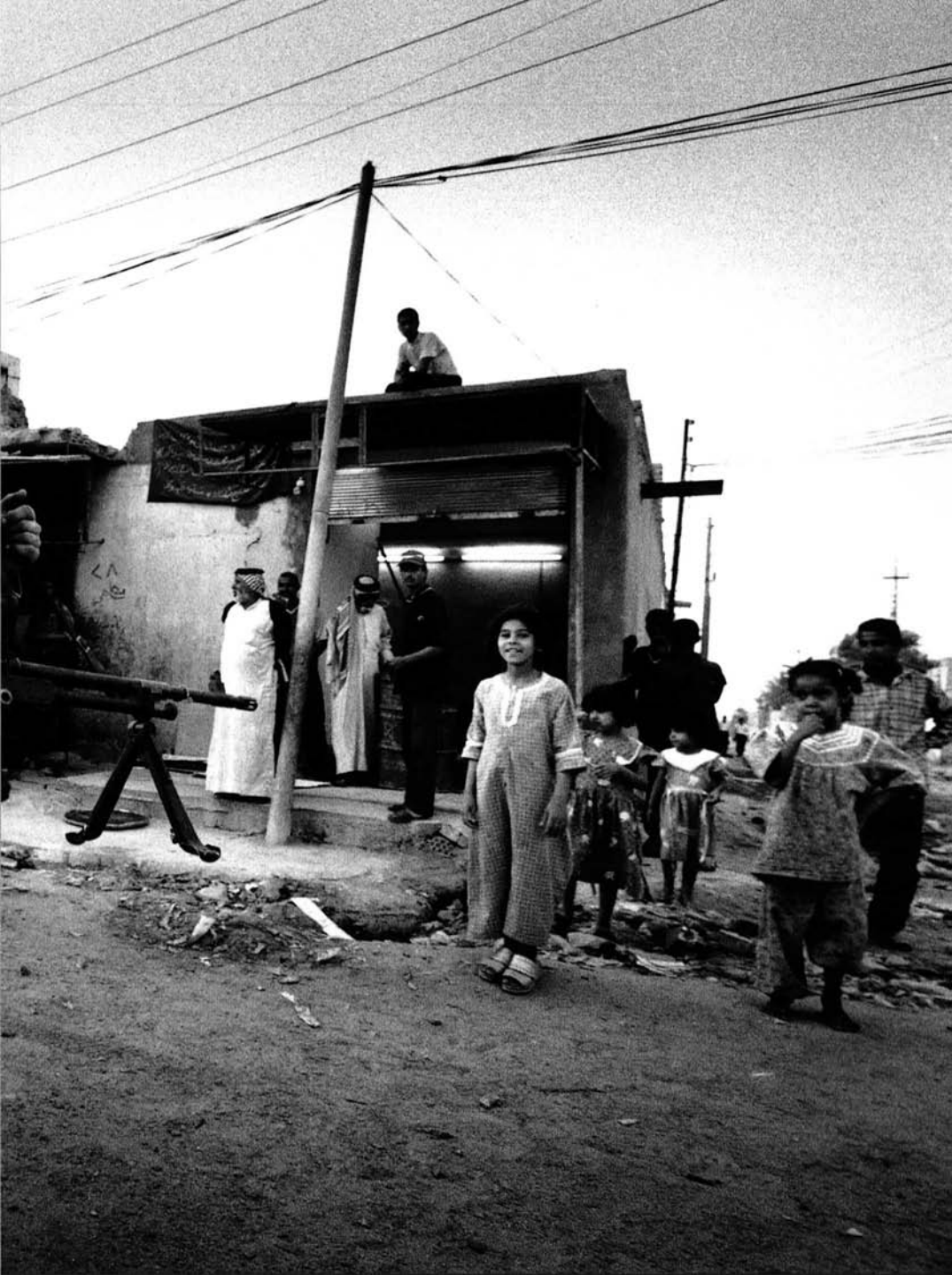
クラスター爆弾の3分の1は、すぐに爆発せず、草や土に覆われて、地雷化する。住民の要請にもかかわらず、米軍の撤去作業は遅々として進まない。前日にも女性が死亡した。

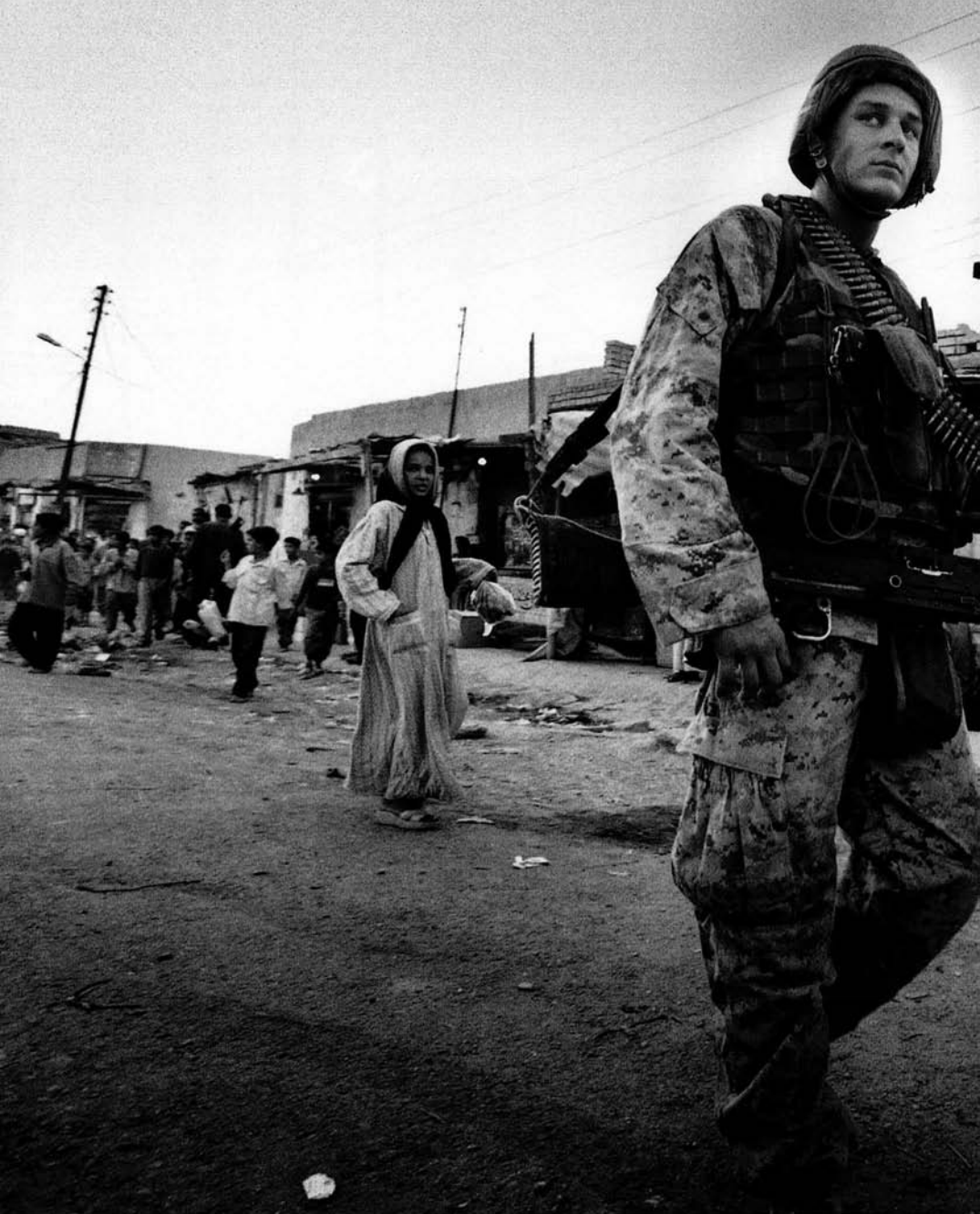
# 占領者アメリカ





バグダッドの計画省を警備する米軍戦車。





パトロールする米兵。日に日に占領者としての顔があらわになっていき、イラク人の反米感情がふくらんでいった。その傾向は、貧しい人びとが住む地域で大きくなっていった。





イラク最南部のウムカスル港入り口を防衛する英軍と、港に入る許可を待つイラク人。許可される人数があまりに少ないため、救援物資の荷下ろしに大きな支障が出ていた。



バグダッドのガソリン・スタンドでは長い列ができ、ガス欠を起こした車が多く見られた。ガソリンを狙った強盗や、混乱を避けるため、米軍が守っていることが多い。





市内パトロールに出た英兵。イラク南部の都市バスラは英軍の管理下にあるが、今でも夜中に銃声がひびいている。



ナジャフで学校を接収する米兵。



ウムカスルで、韓国のNGOが開設した診療所に詰めかけた人びと。

占領者は腐敗していく。そして住民の敵意の原因が自分たちの占領にあることさえ、理解できなくなっていく。そもそもこの戦争は、世界のほとんどの人びとの強い反対を押し切って、アメリカがごり押しして行なったものである。しかも戦争を開始する大義名分のどれ一つとして、戦争終了宣言から2か月以上たっても、正当性が証明されていない。しかし、それに疑問を感じる人びとが少なくなっていることこそ、現在の最大の危機状況なのだろう。

戦争という大量殺戮の決定を、超大国が意のままに行い、国連も含めて誰一人として阻止できないという非常に危険な時代に私たちは突入している。議論と良識の場で殺戮を止められないなら、テロによって一矢を報いたいと考える人間が出てくるのは当然だ。

被害にあった人びとの多くは、いま裁判で米英両国を裁くことを望んでいる。絶望の中から、裁判という「良識」が機能することを望んでいるのだ。バスラで家族10人を殺されたアクラム医師の父アベッドは次のような手紙をバスラ駐在連合軍司令官に出した。

「私は〈正当化すること〉も言い訳も決してできない犯



サウジアラビアが開設した臨時の病院で、治療を受けようと並ぶ人びと。

罪の結果として、私の家族の10人を失った悲痛と苦しみの中でこれを書いております。連合軍の誰一人からも、哀悼の言葉はおろか、同情も、また残忍な虐殺に対する正当な理由さえ、聞いておりません。……私たちの家族を虐殺した連合軍の目的は、何なのでしょうか」

しばらくして英軍司令部からロビン・プリンズの署名のある手紙が来た。

「この爆撃は合法的に行われた攻撃であり、貴殿のご家族の家は意図的に標的にされたわけではないことを私は断言します。連合軍は軍事行動が民間人の負傷者を避けるよう、あらゆる場面で配慮をしております。とはいっても、民間人の犠牲者を全く出さないということは不可能であり、このように民間人が負傷したり、殺されたりする場合は、意図的なものではなく、悲劇的な事故であるということを、貴殿がご理解くださることを私は望んでおります」

アクラムは「この攻撃を決定した人物を戦争犯罪者としてどれだけ時間がかかろうとも裁判で裁くつもりだ。これは自分が生きているかぎり、死んだ家族に対する誓いだ」と語る。アメリカの側について日本人は、この人びとの裁判を支援すべきではないだろうか。

# 戦火消えぬ日々

湾岸危機は、1990年8月にイラク軍がクウェートに侵攻してはじまった。そして91年1月に英米軍がイラクを爆撃して、湾岸戦争が始まった。今から12年前のことである。

この湾岸戦争は遙か昔に終わったと考えている人は多い。しかし劣化ウラン弾による小児白血病の多発という形で、また重金属障害という形で、犠牲者は今に続いている。

十二年前、私が湾岸戦争直後にイラクを訪れたときには、幼児を中心に大勢の子どもたちが下痢とそれによる脱水症状、そして死という事態を迎えていた。浄水場や発電所が爆撃されたため、汚水が子どもたちを直撃したのである。

この戦争はまた、対イラク経済制裁という形で、国民を苦しめた。制裁は初期の頃は、医薬品も乳児用ミルクも対象となり、汚水を濾過する薬品の輸入

も認められなかった。

制裁によるこうした死者は、子供を中心に数十万人にのぼると見られる。湾岸危機の責任者はサダム・フセインにあることは言うまでもないが、これほどの数の犠牲者を出した責任は、むしろ日本を含む世界にあることも確かである。

湾岸戦争には爆撃を行う側の大義名分があった。それでも数十万の子ども死者を出す大義名分が、世界に存在するわけではない。

そして戦争と経済制裁の傷口が深まる中、今度はアメリカが強引にイラク爆撃を決行した。

爆撃で病院を追われた白血病の子どもたちは、確実に死期を早めただろう。クラスター爆弾の被害者も圧倒的に子どもたちだった。

イラク戦争は子どももの殺戮戦争だったと言えるかも知れない。



1991年、400人以上が避難していたバグダッド郊外のアメリカ・シェルターを米軍ミサイルが爆撃した。この壁の跡は、女性が貼りついて焼死した跡である。



アメリカ・シェルターの爆撃の跡。精密誘導爆弾が正確にここを爆破しつくしたが、そもそもここが軍事施設だという情報が間違っていた。犠牲者のすべてが民間人だったのである。

# 白血病の子どもたち







白血病の治療を受ける子ども。(P.52, 53 の子どもたちも同じ)







率の相関関係を見ると、因果関係は間違いない。「劣化ウランが原因で白血病になった子どもの治癒率は極端に低く、ほとんど死亡する」と医者は言う。



白血病治療中の男の子。湾岸戦争（1991年）で米軍の使用した劣化ウラン弾により、多くの子どもたちが白血病に苦しんでいる。米国は因果関係を否定しているが、劣化ウラン弾使用地域と発症 ➤







病室を埋めているのは、白血病患者と脱水症状の子どもたちだ。子どもたちは汚染された水を飲まざるをえなくなり、下痢と脱水症状を起こし、そして多くが死んでいく。





バスラの子ども専用墓地。貧しい家族は墓石の合間を掘って埋めているため、ここに何人が埋葬されているのかわからないという。











## おわりに

今年、私は3回のイラク取材を行なった。最初は2月で戦争直前、次は3月から4月にかけての爆撃下のバグダッド、3度目は、5月に「イラク戦争被害調査チーム」として南部から北部まで被災地を訪れ、遺族や医師80人にインタビューした。バスラの白血病患者病棟には、託された募金13、000ドル（約1、600万円）を届けた。

この取材ではじめて私はイラク戦争の姿をかいま見たように思えた。

イラク戦争が私たちの目に見えにくかったのは、メディアの側にその責任があった。戦争前から開戦が当たり前のごとくキャンペーンを繰り返した新聞、テレビが多くあった。そして従軍記者として送り込まれた人びとも、ただちに戦争の歯車に組み込まれていった。お茶の間に流される戦況報告も含めて、爆撃する側の報告が圧倒的に多く、その爆撃がもたらす被害を検証する仕事は、もっぱらバグダッドのフリーランスのジャーナリストに託された。

こうした報道の姿は、「爆撃する側に立つ日本」にあつては当然かも知れないが、自立したメディアの不足は、戦争に対する批判的な観点を失わせる役目をした。アフガン戦争を経て、日本のメディアがさらに大きく戦争の方に肩入れしていった転換点だったと、後に言われることだろう。

この問題は今に続いている。日本を含む世界のメディアは、イラク戦争は終わった、これからの問題は「復興」であるかのごとく伝えていくが、「イラク戦争で何が行われたのか」の検証さえほとんど取り組んでいないのが実情である。そうした時期に「イラク復興支援特別措置法案（イラク特措法）」が日本の国会に提出された。しかし日本は同盟軍の側に立ったわけだから、私たちがイラクの民間人に何をしたのかをきちんと調べた上で、復興を語るべきであろう。

イラクは巨大なアメリカの占領地として、パレスチナのような混乱状況を呈していくだろうと、4月はじめに私は報告したことがある。そして状況はそれとおりの方向に向けて、刻一刻、悪化し続けているようである。

（2003年6月・エルサレムにて）

## 『編集後記』

「アメリカはイラクで何をしたか」——それは即、「日本はイラクに何をしたか」に通じる。

イラク侵略の間じゅう、世界の多くの人の心とは、「白昼公然と行われる殺人」に息をのみつつあらがう術を失っていた。そして多くの日本人は、その暴挙を自国の首相が牽制するところか支持したところ、それに反対しながら制止し得なかったことに、深い自責の念を抱いた。

しかし、与党は、自らの行為の結果を反省するどころか、いま「イラク特措法」を強引に成立させようとしている。自衛隊の海外派兵を認めるこの法律が成立すれば、必然的に憲法九条は風化し、日本は再び「戦争をする国」になる。

戦争の歴史を検証すると、必ず「折返し不可能点」がある。その一線を過ぎると、大衆がどのような抵抗を試みようとも、もとに戻ることは、ほとんど不可能になる。「あごら」の今号全部を、緊急写真特集にしたのは、「今こそ、その一線」という非常ベルを発信したかったからにはかならない。

事実を直写した映像ほど、訴求力を持つものはない。卓越したフォトグラファーであると同時に傑出したジャーナリストでもある広河隆一さんが、私どもの希望にこたえてくださったことに、心から感謝する。

この二八五号が、イラク特措法阻止に役立つことを、衷心から祈っている。

あごら編集部

## 『取材・翻訳協力』

市川真名、小田川綾音、佐藤愛里子、関根彩子、津田恵香、竹林真理、徳重りこ、  
サラマブルーク、まや・ラミス、アフガン国際戦犯民衆法廷、週刊金曜日

〈あごら〉は、人と人との出会おうひろば——

思い悩んだとき、もつと豊かに生きたいとき、流れを変えたいとき、心おきなく話し合える仲間がいる——。そんなひろばが、北海道から沖縄まで、いつのまにか広がりました。雑誌『あごら』を軸に、よりよい自分と社会を目指すゆるやかな連帯。どの部門にも「長」は置かず、自分を変え、社会を変える——。

「病床からでも参加できる運動」が、モットーです。会費は月刊『あごら』の誌代込みで月額七百元。

「一年前払いが原則ですが、ご相談に応じます。入会金は三千元。ハガキ・FAX・メール・電話を頂ければ、ご案内をお送りします。」

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル 電話 03-3354-3941(代) FAX 03-3354-9014  
Eメール XLV05467@nifty.com ホームページ <http://homepage2.nifty.com/agora/>

あごら 285号 緊急写真報告・アメリカはイラクで何をしたか ●発行2003年6月20日

●編集 あごら新宿

●著者 広河隆一

●発行所 BOC出版部

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4 中公ビル

●TEL 03-3354-3941

●FAX 03-3354-9014 ●E-mail XLV05467@nifty.com

●定価 本体1200円+税

●振替 00100-0-5264 BOCあごら編集部



9784893061331

ISBN4-89306-133-X

C0036 ¥1200E



1920036012008

〒160-0022 東京都新宿区新宿1-9-4

定価 本体1200円+税

